

## 【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成26年2月7日
【四半期会計期間】	第123期第3四半期（自平成25年10月1日至平成25年12月31日）
【会社名】	飯野海運株式会社
【英訳名】	IINO KAIUN KAISHA, LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 関根知之
【本店の所在の場所】	東京都千代田区内幸町二丁目1番1号
【電話番号】	東京（6273）3207
【事務連絡者氏名】	経理グループリーダー 小山聡司
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区内幸町二丁目1番1号
【電話番号】	東京（6273）3207
【事務連絡者氏名】	経理グループリーダー 小山聡司
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

回次	第122期 第3四半期 連結累計期間	第123期 第3四半期 連結累計期間	第122期
会計期間	自平成24年4月1日 至平成24年12月31日	自平成25年4月1日 至平成25年12月31日	自平成24年4月1日 至平成25年3月31日
売上高(百万円)	62,905	72,151	86,021
経常利益(百万円)	1,149	4,225	2,259
四半期(当期)純利益(百万円)	1,126	4,930	1,166
四半期包括利益又は包括利益(百万円)	973	6,485	1,653
純資産額(百万円)	46,547	59,002	47,228
総資産額(百万円)	211,526	223,458	212,724
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	11.26	46.36	11.66
潜在株式調整後1株当たり四半期 (当期)純利益金額(円)	-	-	-
自己資本比率(%)	21.8	26.3	22.0

回次	第122期 第3四半期 連結会計期間	第123期 第3四半期 連結会計期間
会計期間	自平成24年10月1日 至平成24年12月31日	自平成25年10月1日 至平成25年12月31日
1株当たり四半期純利益金額(円)	13.30	11.19

- (注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 売上高には、消費税等は含んでおりません。
3. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

#### 2【事業の内容】

当第3四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社における異動もありません。

## 第2【事業の状況】

### 1【事業等のリスク】

当第3四半期連結累計期間において、新たに発生した事業等のリスクはありません。  
また、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについて重要な変更はありません。

### 2【経営上の重要な契約等】

記載すべき事項はありません。

### 3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 経営成績の分析

当第3四半期連結累計期間の世界経済は、景気低迷の影響が残る欧州経済に持ち直しの兆しが出てきており、米国でも雇用情勢の改善を背景に緩やかな回復傾向にあるなど先進国では明るい動きが見られました。中国は、製造業や不動産投資などに牽引される形で経済成長の減速からの持ち直し傾向が見られました。一方、東南アジアや中南米諸国などでは、米国の金融緩和策の縮小や新興国経済に対する成長期待の陰りを背景に、資本流出が続いており、景気減速の動きも見られました。

わが国では、安倍内閣の各種政策の効果が見られるなかで、2020年の東京オリンピックの開催決定が更なる後押しとなり、景気は緩やかな回復傾向を見せました。

当社グループの海運業においては、為替は前年同期に比べ円安に推移し、一部の船種では年末にかけて市況の回復が見られましたが、全体としては、新興国の需要の鈍化により市況の低迷が続く、事業を取り巻く環境は大きくは改善しませんでした。このような事業環境の下、既存契約の有利更改をはじめとして、効率配船および減速航海による燃料費削減に努め、収益改善に取り組みました。

不動産業においては、飯野ビルディングをはじめとする各ビルが順調に稼働しており、安定した収益を確保しました。

以上の結果、売上高は721億51百万円（前年同期比14.7%増）、営業利益は52億95百万円（前年同期比75.0%増）、経常利益は42億25百万円（前年同期比267.7%増）、四半期純利益は49億30百万円（前年同期比337.8%増）となりました。

各セグメント別の状況は次の通りです。

#### 外航海運業

当第3四半期連結累計期間の外航海運市況は以下の通りです。

原油タンカーにおいては、9月頃までは荷動きが減少したことから市況は総じて低調に推移しましたが、10月以降は原油の需要期に入ったこと、西アフリカから中国等への長距離輸送が増加したこと、老齢船のスクラップが進み船腹供給圧力が減少したことなどや悪天候が相俟って年末にかけて高騰しました。プロダクトタンカーにおいては、米国のシェールオイルの輸出量の増加から一時的に回復が見られましたが、市況は総じて軟調に推移しました。

ケミカルタンカーにおいては、世界経済の停滞により石油化学製品の需要は5-7月頃に落ち込みましたが、その後は冬場に向け改善が見られました。しかし、インドや東南アジアでは通貨安や在庫高の影響で輸送需要が大きく伸びず、市況は昨年に比べ低調に推移しました。

大型ガスキャリアのうち、LPGキャリアは北米積みを中心に世界的に堅調な荷動きを維持し、中東/日本往復運賃もUS\$60/MT前後で安定的に推移しました。また、LNGキャリアは船腹需給が均衡し、依然として市況は高値水準で推移しました。

ドライバルクキャリアにおいては、新造船の大量竣工が続いたことなどから市況は夏場に向け総じて低調に推移しましたが、秋の北米積み穀物の出荷シーズン本格化以降は、パナマックス、ハンディサイズともに市況は強含み基調となりました。

なお、当第3四半期連結累計期間における当社グループの平均為替レートは/98.54/US\$（前年同期は/79.75/US\$）、平均燃料油価格はUS\$624/MT（前年同期はUS\$676/MT）となりました。

このような事業環境の下、当社グループの外航海運業の概況は以下の通りとなりました。

原油タンカーおよびプロダクトタンカーにおいては、支配船腹の大半を中長期契約に継続投入することにより、安定収益の確保に努めました。

ケミカルタンカーにおいては、中東航路では中東積みの契約数量を順調に消化し、北アフリカからインド向けの燐酸液やアジアからインド・パキスタン向けパームオイルを積極的に集荷し安定的な輸送数量を確保しました。ま

た、市況および荷動きの変動に対応するために市場から調達したコーティング船を利用して柔軟に船腹量の調整を行いました。米国オペレーターとの合併事業においてはスポット貨物を中心に集荷し、安定した輸送量を確保しました。

大型ガスキャリアにおいては、LPGキャリアとLNGキャリアともに既存の中長期契約への投入により安定収益を確保しました。

ドライバルクキャリアにおいては、石炭専用船や木材チップ専用船での長期契約に加え、数量輸送契約による収益の安定化、運航経費の削減による収益改善に取り組みました。ハンディサイズでは顧客ニーズの変化を見据え船型の大型化に着手しました。併せて多様な船型サイズを効率配船できるよう太平洋・インド洋航路における貨物カバー率を高めました。

以上の結果、外航海運業の売上高は568億59百万円（前年同期比17.3%増）、営業利益は15億46百万円（前年同期は1億86百万円の営業損失）となりました。

#### 内航・近海海運業

当第3四半期連結累計期間の内航・近海海運市況は以下の通りです。

内航輸送においては、LPGでは冬場の需要期に入り年末にかけて荷動きが回復しました。石油化学ガスにおいては川下製品である石油化学樹脂の国内出荷量が前年実績を上回るなど国内需要は回復基調を維持し、原料となるエチレンの生産設備の稼働率が向上、荷動きは堅調に推移しました。

近海輸送においては、海外石油化学プラントの設備トラブルの影響や石油化学製品の需要低迷により荷動きが減少し、市況は総じて低調に推移しました。

このような事業環境の下、当社グループの内航・近海海運業の概況は以下の通りとなりました。

内航輸送においては、特定荷主との契約に基づく専航船が安定収益に寄与し、その他の運航船も稼働率が回復しました。

近海輸送においては、支配船腹の大半を中長期契約に投入し安定収益の確保に努めました。また期中に返船予定であった6,800M<sup>3</sup>型ガスキャリア1隻について荷主の輸送ニーズに応え契約を延長し、収益の維持・拡大を図りました。

以上の結果、内航・近海海運業の売上高は67億49百万円（前年同期比13.9%増）、営業利益は5億61百万円（前年同期比226.2%増）となりました。

#### 不動産業

当第3四半期連結累計期間の不動産市況は以下の通りです。

都心のオフィスビル賃貸市況は、11月・12月は新規供給の予定がないことを背景に空室率・賃料水準とも改善に向かうとの期待が高まりましたが、オフィスの統合・集約による周辺部からの移転や業績の向上・事業拡大に伴う増床などから空室率の下落は見られるものの、築浅の一部物件を除き、割安感を軸としたビル間競争から全体的な賃料改善傾向とはなっていません。ホールやカンファレンスルームにおいては、多数の競合施設がある中、顧客の繋ぎ止めを含め、厳しい顧客獲得競争が続いております。フォトスタジオにおいては、広告需要に回復の兆しが見られる一方、雑誌販売は引き続き低迷しており、出版系の撮影は件数、単価とも低調に推移しました。

このような事業環境の下、当社グループの不動産業の概況は以下の通りとなりました。

賃貸ビルにおいては、所有する各ビルで良質なテナントサービスを提供することにより空室の解消が進み、安定稼働を維持しました。当社グループのイノホール&カンファレンスセンターにおいては、セミナー、講演会、映画試写会、その他催事の積極的な誘致により、稼働の維持に努めました。スタジオ関連事業を行うイノ・メディアプロにおいては、スタジオ部門を取り巻く環境は引き続き厳しいものの、ロケーション、レタッチ、プロデュースの各部門では新規案件の取得もあり堅調に推移しました。

以上の結果、不動産業の売上高は86億24百万円（前年同期比0.7%増）、営業利益は31億87百万円（前年同期比4.8%増）となりました。

#### (2) 財政状態の分析

当第3四半期連結会計期間末の総資産残高は前連結会計年度末に比べ107億34百万円増加し、2,234億58百万円となりました。これは主に自己株式の処分による現金及び預金の増加や投資による建設仮勘定の増加によるものです。

負債残高は借入金の減少などにより前連結会計年度末に比べ10億41百万円減少し、1,644億55百万円となりました。

純資産残高は前連結会計年度末に比べ117億74百万円増加し、590億2百万円となりました。これは主に利益剰余金の増加および自己株式の処分によるものです。

### (3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当第3四半期連結累計期間において、当連結会社の事業上及び財務上の対処すべき課題に重要な変更及び新たに生じた課題はありません。

### (4) 当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

#### 1. 当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針の内容の概要

当社は、同業種あるいは異業種他社との提携や企業買収が、当社の中長期的な企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益の向上の実現に向けた有力な手段の一つとなり得ると認識しておりますが、そのような他社との提携や企業買収は、当事者同士が納得、合意した上で友好裡に進められてこそ、当社の中長期的な企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益の最大化の実現を図ることができるものであると考えております。また、大規模買付行為(下記3.において定義されます。以下同じです。)を受け入れるかどうかは、当社の経営を誰に委ねるべきかという問題に関連しますので、最終的には株主の皆様のご判断によるべきものであると考えております。

しかしながら、昨今、わが国においても敵対的な企業買収の動きが活発化してきております。当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を向上させる買収提案が経営者の保身目的で妨げられてはならないことは当然のことであり、また、当社取締役会の同意を得ない買収提案が必ずしも当社の企業価値を損ない株主の皆様との共同の利益を害するものであるとは限らないものの、このような敵対的な企業買収の中には、株主の皆様に対して当該企業買収に関する十分な情報が提供されず株主の皆様は株式の売却を事実上強要するおそれがあるものや、株主の皆様が当該企業買収の条件・方法等について検討し、また、当社取締役会が代替案の提示等を行うための十分な時間を確保することができないもの、その他真摯に合理的な経営を行う意思が認められないもの等の当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を著しく損なう企業買収もあり得るものです。

当社は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、当社の企業理念、当社の企業価値の様々な源泉及び当社を支える各利害関係者との信頼関係を十分に理解した上で、当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を中長期的に確保し又は向上させることを真摯に目指す者でなければならないと考えております。したがって、上記のような企業買収に該当する行為等の当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を著しく損なう大規模買付行為を行う者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として不適切であると考えております。

#### 2. 基本方針の実現に資する特別な取組みの概要

当社は、多数の投資家の皆様の中長期的に継続して当社に投資して頂くため、当社の企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益を向上させるための取組みとして、下記の中期経営計画等による企業価値向上への取組み及び下記のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方に基づくコーポレート・ガバナンスの充実のための取組みを実施しております。

##### 中期経営計画等による企業価値向上への取組み

#### ア. 当社の事業の概要

当社は、海運業と不動産業を事業の柱とし、企業としての最大の経営課題である中長期的な企業価値ひいては株主の皆様との共同の利益の最大化を図る観点から、海運市況、金利及び為替等の変動要素が多く収益の変動率が大きい海運業と、変動要素が相対的に少なく収益が安定している国内を基盤とする不動産業とを適切に組み合わせることにより、新興国を中心とした世界の経済成長を取り込む事業と国内の安定的な事業の双方をバランスよく行うことを経営の基本方針としております。

当社の海運業は、オイルタンカー、ガスキャリア及びケミカルタンカーを中心とした液体貨物輸送業並びにドライバルクキャリアによるばら積み貨物輸送業から構成されております。当社は、液体貨物輸送業においては、中東諸国、アジア各国の顧客との間で長年に亘る信頼関係を築いており、また、ばら積み貨物輸送業においては、国内電力各社、製紙会社との中長期の契約関係に基づき専用船を主体とした安定輸送に従事しており、いずれも取引先企業から高い評価を得ております。さらに、海運業において当社が輸送する主要貨物は、日本をはじめ世界各国に必要不可欠な物資であり、当社はこれを安全且つ安定的に輸送することにより顧客の信頼を獲得しており、それを当社の事業の基盤とするとともに、国内外の地域社会との共存共栄を図ることに貢献しているものと自負しております。

一方、不動産業においては、東京都心部の中でも立地条件が良く高い稼働率が期待できる地区においてオフィスビル賃貸事業を核として展開しており、多目的ホールの運営やフォトスタジオの運営等の不動産周辺事業の発展にも力を注いでいます。平成23年10月に開業を迎えた飯野ビルディング(東京都千代田区内幸町)は、日比谷公園を望む良好な立地に加え、高い耐震性や高度なセキュリティ機能を備えています。さらに、世界最高水準の環境性能を有し、自然環境にも配慮した快適なビジネス環境を提供するオフィスビルとなっており、国内外の多くの機関から高い評価を得ております。また、旧飯野ビルディングのシンボルとして長年顧客の皆様にご利用頂いておりましたイノホールは、新たに併設されたカンファレンスセンターとともに装いも新たに生まれ変わり、落語会、演奏会、映画試写会といった催しや講演会・式典等の様々な用途にご利用頂いており、当社の文化的事業の拠点として、その伝統を受け継いでおります。当社は不動産業において、ゆとりある安全な空間を提供することにより、顧客である各企業の信頼を得ており、海運業と同様に、それを当社の事業の基盤とするとともに、当社が提供するゆとりある安全な空間において顧客である各企業が安心して事業を展開することを通じて、間接的に地域社会を含む社会全体に貢献しているものと考えております。

このような当社に対する高い評価と信頼は、当社が特定の企業系列に属さずに独立的・中立的企業として100年以上もの間に亘り、事業を営んできたことにより培われたものであり、それは当社の企業価値の基盤となっております。

当社が営む海運業及び不動産業において、安全の確保は、事業の発展基盤であり、当社の企業価値の基礎であるとともに、国内外の地域社会を含む社会全体への貢献の基盤となっておりますが、両事業において安全を確保するためには、中長期的な視点からの安定的な経営が不可欠となります。変動要素が多く収益の変動率が大きい海運業と、変動要素が相対的に少なく収益が安定している不動産業とを適切に組み合わせることは、当社全体の経営の安定に資するものと考えています。

また、当社は海運業と不動産業とを適切に組み合わせるといふ経営の基本方針を達成するために、双方の事業にバランスよく投資を行っております。特に、中長期的な視点からのヒトへの投資と教育が必要不可欠であると考えており、両事業間の人事交流を含め、双方の事業に対して経営資源の適切な配分を行っております。とりわけ、市況等の変動が収益に及ぼす影響の大きい海運業については、当社の企業体力にあった設備投資を志向するとともに、市況変動への耐性を強化するため、自社による保有船と他社からの調達船のバランスを考慮して投資を行い、また、調達船の傭船期間についても、短期・中期・長期と分けることにより、船腹調達の多様化を図っております。

以上のとおり、当社は、常に、中長期的な視点から安定的な経営を行うことを経営判断の基盤に置きつつ、海運業と不動産業とを適切に組み合わせることによって、当社グループ全体の中長期的な業績の向上を目指しております。

現在、海運業を取り巻く事業環境は厳しいものの、安定収益基盤の強化につながる専用船事業の拡充等により可能な限り事業リスクを制御しながら当社の中核的な事業としてこれを継続していくことは、中長期的には今後伸長が予想される新興国を中心とした世界の経済成長を取り込むことにつながり、これにより収益の拡大基盤を構築することが期待できます。また、収益の変動率が大きい海運業と相対的に収益が安定している国内の不動産業とを適切に組み合わせることは、両事業の発展の基盤である安全の確保のために不可欠である当社全体の経営の安定に資するものと考えております。よって、海運業と不動産業を当社の事業の柱とし、双方をバランスよく行うことは、当社の企業価値の向上に資するものと考えておりますので、双方の事業について、引き続き事業基盤の整備を進めてまいります。さらに、大きな収益は見込めないものの当社グループのブランドイメージの向上や社会全体に貢献する文化的事業についても取り組んでまいります。下記イ.の中期経営計画もこれらの方針に基づいて策定されておりますが、その方針は、当社の企業価値ひいては株主の皆様のご共同の利益の最大化に資するものと考えております。

## イ. 中期経営計画

当社グループは、平成23年4月14日に、3ヵ年間の中期経営計画「IEG14(lino's Evolutionary Growth Plan to 2014)」(平成23年4月～平成26年3月)を策定し、海運業での新たな成長と不動産業での収益基盤の強化を図ることにより、企業価値の向上を目指した事業基盤の整備を進めております。

前回の中期経営計画では、「永続的な成長企業」を目指し「ISG12」(lino's Strategic Growth Plan to 2012)を策定しましたが、いわゆるリーマンショックを境に海運業と不動産業の事業環境は大きく変化し、それ以前に策定された「ISG12」についても実効性の観点から事業環境にそぐわない点も多くなったことから、同計画期間最終年度を待たず、新たに「IEG14」を策定しました。

「IEG14」では、特に当社グループの海運業の更なる成長を目指した構造改革を行い、海運業と不動産業を両輪とした経営の一層の質的強化を図り、厳しい事業環境を乗り越えられるよう努めております。

そして、「IEG14」における目標達成のため、より具体的な事業上の目標として「3つの柱」と「5つの土台」を構築し、それらをさらに強化・深化することを掲げて計画を遂行しております。「3つの柱」の1つ目は「ケミカルタンカー事業の構造改革」であり、新規航路開拓等により収益性の向上を図るとともに不経済船の減船に加え、船腹需給の調整弁としての船腹調達の多様化を図ることによりコスト競争力の強化に取り組んでおります。2つ目

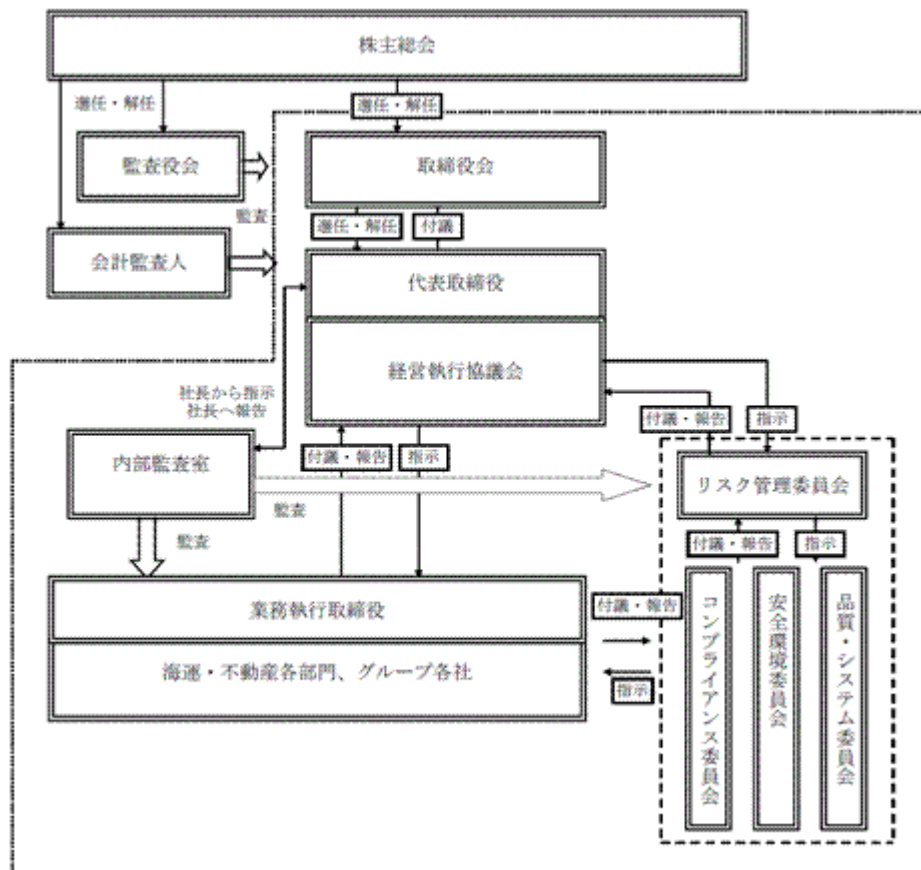
は、「不動産を含めた安定収益基盤の強化」です。不動産では、満室で開業した飯野ビルディングを含めた既存ビルの安定的な稼働に向けて、ビル運営と管理業務の品質の向上に取り組んでおります。一方、海運業では、特定の顧客に継続的に同一船舶を提供する専用船事業の拡充を目標としております。3つ目は、「新興国需要を取り込んだ中小型船の事業展開」です。ドライバルクキャリア事業では、鋼材輸送を核とした航路展開を図っております。一方、中小型ガスキャリア事業では、アジア域内配船を中心とした事業の育成と強化を図っております。これらの3つの柱を支える「5つの土台」は「市況変動に対する耐性強化」、「財務基盤の強化」、「質的転換」、「安全の徹底」及び「環境負荷低減への取組み」であり、特に「市況変動に対する耐性強化」の取組みについては、「ERM」全社的リスクマネジメント(Enterprise Risk Management)による管理浸透に注力しており、市況・為替・事業コスト等の外部変動要因を総合的に把握し、経営判断に役立てております。

このように、当社グループは「3つの柱」と「5つの土台」を構築し、それらをさらに強化・深化することにより、継続的に企業価値の向上に取り組んでおります。

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

(1) コーポレート・ガバナンス(企業統治)に関する基本的な考え方

当社グループでは、コーポレート・ガバナンス(企業統治)を「企業を構成する様々な主体(ステークホルダー)間の利害を調整し、効率的な企業活動を実現する為の枠組み」と考えております。そのため、取締役会をはじめとする各経営組織における意思決定及び業務の執行については、法の定める趣旨に加えて、株主、従業員及びその他のステークホルダーとの関係に配慮し、常に最良の経営成果をあげられるよう不断の努力を重ねております。



(2) コーポレート・ガバナンス(企業統治)に関する施策の実施状況

< 企業統治の体制 >

当社は、取締役会及び監査役会により、業務執行の監督及び監査を行っております。重要事項の決定及び取締役の業務執行の監督を行うために、原則として毎月1回定例取締役会を開催し、また、常勤監査役と社外監査役である非常勤監査役で構成される定例監査役会を毎月1回開催するとともに、代表取締役社長直属の内部監査室、監査役及び会計監査人が相互に連携して監査に当たる体制をとっております。

取締役の職務の執行が効率的に行われるために、取締役により構成される経営執行協議会を原則として毎週開催し、取締役会に付議又は報告される事項の審議、取締役の業務執行に関する重要事項の審議及び経営に関する意見交換・情報交換を行っております。

< 内部統制システム及びリスク管理体制の整備の状況 >

当社グループにおきましては業務執行の適正化を図るべく以下のとおり内部統制システム及びリスク管理体制を構築しております。

- 1) 当社グループにおいては、グループ全体のリスクに関する横断的な管理とその方針について審議・提案・助言を行うために「リスク管理委員会」を設置した上で、その下部機関として「安全環境委員会」、「品質・システム委員会」及び「コンプライアンス委員会」の三委員会を設置しております。「リスク管理委員会」は、三委員会に対する指示を行い、三委員会から付議・報告を受ける等して、事業に係る戦略リスク・重要投資案件のリスク等を含めて、グループ全体のリスク管理活動を統括しております。



- 2)取締役・使用人の職務の執行に係るコンプライアンスにつきましては、「行動憲章」及び「コンプライアンス規程」をコンプライアンス体制の基礎とし、「コンプライアンス委員会規程」に基づき設置された「コンプライアンス委員会」(委員長：チーフコンプライアンスオフィサーである当社ステークホルダーリレーションズマネジメント・調査グループ担当業務執行取締役)により、コンプライアンスに関する政策立案とその推進を図っております。また、「コンプライアンス規程」に基づき、チーフコンプライアンスオフィサーは監査役及び内部監査室と連携してコンプライアンスに関する業務を指揮し、役職員は、法令違反等に関する報告義務及び内部警報連絡義務を負っております。
- 3)当社グループの業務執行の過程で発生する可能性のある、船舶・建物における重大な事故・トラブル等のリスクにつきましては、「安全環境委員会規程」に基づき設置された「安全環境委員会」により、当社グループの安全及び環境に関する政策立案とその推進を行うとともに、予防的措置も含めた対策の徹底・強化を図っております。
- 4)システム及び事務に関するリスクにつきましては、「品質・システム委員会規程」に基づき設置された「品質・システム委員会」により、当社グループのシステム及び事務に関する政策立案とその推進を行うとともに、システムダウン等に係る予防的措置も含めた対策の徹底・強化を図っております。
- 5)さらに、不測の事故、特に油濁等の環境汚染や、人命・財産に係る重大な事故・トラブル・大規模災害が発生した場合等の緊急時においては、「危機管理基本規程」に基づき代表取締役社長を本部長とする緊急対策本部を設置し、危機管理に当たります。また、当社グループは、事業地域において大規模地震が発生した場合を想定した事業継続計画(BCP)を制定し、各事業の速やかな復旧と継続を図ることができる体制を整備しております。
- 6)取締役・使用人の職務の執行に係る情報の保存及び管理につきましては、「文書保存規程」、「文書管理基本方針書」、「文書管理実施規程書」及び「情報セキュリティ基本規程」等の社内諸規程に基づき、管理責任者を定めて適切に保存し管理する体制をとっております。

当社といたしましては、以上の施策を実施する体制が、企業を構成する様々な主体(ステークホルダー)間の利害を調整し、効率的な企業活動を実現するために最適なコーポレート・ガバナンス(企業統治)の形態であると考えております。

#### <責任限定契約の内容の概要>

当社は、社外取締役及び社外監査役との間で、会社法第427条第1項の規定に基づき、その職務を行うにつき善意で且つ重過失がないときは、賠償責任の限度額を法令の定める額とする旨の責任限定契約を締結しております。

### 3. 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みの概要

当社は、平成25年4月30日開催の当社取締役会において、同年6月26日開催の当社第122期定時株主総会において出席株主の皆様の議決権の過半数のご賛同を得て承認可決されることを条件として、当社の株券等の大規模買付行為に関する概ね下記の内容の対応方針(以下「本方針」といいます。)を導入することを決定し、また、本方針の導入については上記定時株主総会において出席株主の皆様の議決権の過半数のご賛同を得て承認可決頂いております。なお、本方針の有効期間は、平成28年に開催予定の当社第125期定時株主総会の終結時までです。また、平成25年9月30日現在の当社の大株主の状況につきましては、第123期第2四半期報告書の「第3 提出会社の状況 1 株式等の状況 (6) 大株主の状況」をご参照下さい。

本方針の内容の詳細については、当社ホームページ(<http://www.iino.co.jp/kaiun/docs/20130430-4.pdf>)をご参照下さい。

## 記

### 本方針の対象となる行為

本方針は、特定株主グループの議決権割合を20%以上とすることを目的とする当社の株券等の買付行為、又は、結果として特定株主グループの議決権割合が20%以上となるような当社の株券等の買付行為(いずれも事前に当社取締役会が同意したものを除きます。このような買付行為を以下「大規模買付行為」といい、大規模買付行為を行い又は行おうとする者を以下「大規模買付者」といいます。)を対象としております。

### 大規模買付ルールの設定

大規模買付者に従って頂く大規模買付ルールは以下のとおりです。

#### ア．大規模買付意向表明書の当社への事前提出

まず、大規模買付者には、大規模買付行為に先立ち、当社代表取締役社長に対して、本方針に定められた手続(以下「大規模買付ルール」といいます。)に従って大規模買付行為を行う旨の誓約等を記載した大規模買付意向表明書を提出して頂きます。

#### イ．大規模買付情報の提供

当社は、大規模買付意向表明書を提出して頂いた日から10営業日(初日不算入)以内に、大規模買付者に対して、提供して頂くべき情報を記載した提供情報リストを発送いたしますので、大規模買付者には、かかる提供情報リストに従って十分な情報を当社代表取締役社長に提供して頂きます。

上記の提供情報リストに従い大規模買付者から提供して頂いた情報では、当該大規模買付行為の内容及び態様等に照らして、株主の皆様のご判断及び当社取締役会の評価・検討等のために不十分であると当社取締役会が外部専門家等の助言を得た上で、合理的に判断する場合には、当社取締役会が別途請求する追加の情報を大規模買付者から提供して頂きます。

また、当社は、大規模買付者から提供された情報が、大規模買付行為に対する株主の皆様のご判断及び当社取締役会の評価・検討等のために必要且つ十分な情報(以下「大規模買付情報」といいます。)として十分であり、大規模買付情報の提供が完了したと当社取締役会において合理的に判断されるときには、速やかに、その旨を大規模買付者に通知(以下「情報提供完了通知」といいます。)するとともに、その旨を開示いたします。

#### ウ．取締役会評価期間の設定等

当社は、情報提供完了通知を行った後、必要に応じて外部専門家等の助言を得た上で、大規模買付行為の評価の難易度等に応じて、最長60日間又は90日間を、当社取締役会による評価、検討、交渉、意見形成及び代替案立案のための期間(以下「取締役会評価期間」といいます。)として設定します。

当社取締役会は、取締役会評価期間中に、大規模買付行為に関する当社取締役会としての意見を慎重にとりまとめ、大規模買付者に通知するとともに、速やかに株主の皆様を開示いたします。

なお、当社取締役会が取締役会評価期間内に当社取締役会としての意見をとりまとめることができないことにつきやむを得ない事情がある場合には、当社取締役会は、必要に応じて外部専門家等の助言を得た上で、当社取締役会から独立した組織である特別委員会に対して、その是非について諮問し、その勧告を最大限尊重した上で、合理的に必要と認められる範囲内で取締役会評価期間を最長30日間延長することができるものとします。

大規模買付者は、この取締役会評価期間の経過後においてのみ、大規模買付行為を開始することができるものとします。

#### 大規模買付行為がなされた場合における対応方針

大規模買付者が大規模買付ルールに従わずに大規模買付行為を行い又は行おうとする場合には、当社取締役会は、特別委員会に諮問し、その勧告を最大限尊重した上で、必要且つ相当な対抗措置を発動することといたします。

これに対して、大規模買付者が大規模買付ルールに従って大規模買付行為を行い又は行おうとする場合には、原則として、当該大規模買付行為に対する対抗措置は発動しません。但し、当該大規模買付行為が当社の企業価値ひいては株主の皆様の共同の利益を著しく損なうものであると認められる場合には、当社取締役会は、特別委員会に諮問し、その勧告を最大限尊重した上で、必要且つ相当な対抗措置を発動することがあります。

当社取締役会が対抗措置を発動する場合には、社外監査役を含む当社監査役全員(但し、事故その他やむを得ない事由により当該取締役会に出席することができない監査役を除きます。)の賛成を得た上で決議することといたします。

なお、所定の場合には、対抗措置の発動に際して、その是非につき株主の皆様のご意思を確認するための株主総会(以下「株主意思確認総会」といいます。)を招集し、対抗措置を発動するか否かのご判断を株主の皆様に行って頂くことができるものとします。株主意思確認総会を招集する場合には、当社取締役会は、特別委員会への諮問の手続を経ることなく、株主意思確認総会決議の内容に従って対抗措置の発動の決議をすることができます。

本方針における対抗措置としては、新株予約権(以下「本新株予約権」といいます。)の無償割当てその他法令及び当社の定款上認められる手段を想定しております。そして、本新株予約権については、当社の株券等の大量保有者等は非適格者として行使することができない旨の差別的行使条件を定めることを予定しております。また、当社

は、上記非適格者以外の株主の皆様が所有する本新株予約権を取得し、これと引替えに本新株予約権1個につき当社の普通株式1株を交付することができる旨の差別的取得条項を定めることを予定しております。

#### 本方針の廃止及び変更

本方針の有効期間の満了前であっても、( )当社株主総会において本方針の廃止若しくは変更が決議された場合又は( )当社取締役会において本方針の廃止が決議された場合には、本方針はその時点で廃止又は変更されます。また、( )平成26年以降毎年の当社定時株主総会の終結直後に開催される当社取締役会において、本方針の継続が決議されなかった場合には、本方針はその時点で廃止されます。

#### 4. 上記2.の取組みについての当社取締役会の判断

当社は、多数の投資家の皆様に中長期的に継続して当社に投資して頂くため、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を向上させるための取組みとして、上記2.の取組みを実施しております。これらの取組みの実施を通じて、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を向上させ、それを当社株式の価値に適正に反映させていくことにより、上記のような当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を著しく損なう大規模な買付行為は困難になるものと考えられ、これらの取組みは、上記1.の基本方針に資するものであると考えております。

したがって、上記2.の取組みは上記1.の基本方針に沿うものであり、株主の皆様様の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

#### 5. 上記3.の取組みについての当社取締役会の判断

上記3.の取組みは、十分な情報の提供と十分な検討等の期間の確保の要請に応じない大規模買付者及び当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を著しく損なう大規模買付行為を行い又は行おうとする大規模買付者に対して、対抗措置を発動できることとしています。したがって、上記3.の取組みは、これらの大規模買付者による大規模買付行為を防止するものであり、上記1.の基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みであります。また、上記3.の取組みは、当社の企業価値ひいては株主の皆様様の共同の利益を確保し又は向上させることを目的として、大規模買付者に対して、当該大規模買付者が実施しようとする大規模買付行為に関する必要な情報の事前の提供及びその内容の評価・検討等に必要期間の確保を求めるために導入されるものです。さらに、上記3.の取組みにおいては、株主意思の重視(株主総会決議による導入、株主意思確認総会の招集及びサンセット条項)、合理的且つ客観的な対抗措置発動要件の設定、特別委員会の設置等の当社取締役会の恣意的な判断を排し、上記3.の取組みの合理性・公正性を確保するための様々な制度及び手続が確保されているものであります。

したがって、上記3.の取組みは上記1.の基本方針に沿うものであり、株主の皆様様の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

#### (5) 研究開発活動

記載すべき事項はありません。

### 第3【提出会社の状況】

#### 1【株式等の状況】

##### (1)【株式の総数等】

###### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	440,000,000
計	440,000,000

###### 【発行済株式】

種類	第3四半期会計期間末 現在発行数(株) (平成25年12月31日)	提出日現在発行数(株) (平成26年2月7日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	111,075,980	111,075,980	東京証券取引所 (市場第一部) 福岡証券取引所	権利内容に何ら限定 のない当社における 標準となる株式であ り、単元株式数は100 株であります。
計	111,075,980	111,075,980	-	-

##### (2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### (5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成25年10月1日～ 平成25年12月31日	-	111,075	-	13,092	-	6,233

##### (6)【大株主の状況】

当四半期会計期間は第3四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(7)【議決権の状況】

【発行済株式】

平成25年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 103,200	-	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
完全議決権株式(その他)	普通株式 110,846,500	1,108,465	同上
単元未満株式	普通株式 126,280	-	同上
発行済株式総数	111,075,980	-	-
総株主の議決権	-	1,108,465	-

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式55株が含まれております。

【自己株式等】

平成25年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
(自己保有株式) 飯野海運株式会社	東京都千代田区 内幸町二丁目1番1号	103,200	-	103,200	0.09
計	-	103,200	-	103,200	0.09

2【役員】の状況】

前事業年度の有価証券報告書提出日後、当四半期累計期間において役員の異動はありません。

## 第4【経理の状況】

### 1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）及び「海運企業財務諸表準則」（昭和29年運輸省告示第431号）に基づいて作成しております。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第3四半期連結会計期間（平成25年10月1日から平成25年12月31日まで）及び第3四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年12月31日まで）に係る四半期連結財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による四半期レビューを受けております。

## 1【四半期連結財務諸表】

## (1)【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

## 【四半期連結損益計算書】

## 【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年12月31日)
売上高	62,905	72,151
売上原価	55,462	62,287
売上総利益	7,443	9,864
販売費及び一般管理費	4,418	4,569
営業利益	3,026	5,295
営業外収益		
受取利息	27	33
受取配当金	244	268
為替差益	263	311
持分法による投資利益	-	373
その他営業外収益	27	70
営業外収益合計	562	1,055
営業外費用		
支払利息	2,061	2,097
持分法による投資損失	266	-
その他営業外費用	112	29
営業外費用合計	2,439	2,126
経常利益	1,149	4,225
特別利益		
固定資産売却益	211	935
投資有価証券売却益	71	-
その他特別利益	-	22
特別利益合計	282	957
特別損失		
減損損失	150	-
投資有価証券評価損	0	10
固定資産除却損	6	4
その他特別損失	15	1
特別損失合計	172	16
税金等調整前四半期純利益	1,259	5,166
法人税等	136	174
少数株主損益調整前四半期純利益	1,123	4,992
少数株主利益又は少数株主損失( )	3	62
四半期純利益	1,126	4,930

【四半期連結包括利益計算書】  
 【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自 平成24年4月1日 至 平成24年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年12月31日)
少数株主損益調整前四半期純利益	1,123	4,992
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	1	1,220
繰延ヘッジ損益	130	237
為替換算調整勘定	56	410
持分法適用会社に対する持分相当額	36	100
その他の包括利益合計	151	1,493
四半期包括利益	973	6,485
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	1,065	6,585
少数株主に係る四半期包括利益	92	100



## ( 2 ) 【四半期連結貸借対照表】

( 単位：百万円 )

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成25年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	8,670	11,665
受取手形及び売掛金	9,045	9,107
貯蔵品	2,935	3,042
商品	34	63
販売用不動産	177	177
繰延及び前払費用	1,739	2,194
繰延税金資産	41	41
未収還付法人税等	398	-
その他流動資産	2,770	8,723
貸倒引当金	-	1
流動資産合計	25,810	35,011
固定資産		
有形固定資産		
船舶(純額)	70,247	68,109
建物及び構築物(純額)	52,313	50,870
土地	40,019	40,019
建設仮勘定	2,061	4,795
その他有形固定資産(純額)	6,474	6,194
有形固定資産合計	171,114	169,988
無形固定資産		
電話加入権	9	9
その他無形固定資産	595	556
無形固定資産合計	604	566
投資その他の資産		
投資有価証券	13,695	15,745
長期貸付金	143	132
繰延税金資産	228	218
その他長期資産	1,131	1,800
貸倒引当金	2	2
投資その他の資産合計	15,195	17,894
固定資産合計	186,914	188,447
資産合計	212,724	223,458

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成25年12月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	6,376	6,636
1年内償還予定の社債	200	100
短期借入金	27,736	39,458
未払費用	301	333
未払法人税等	39	125
繰延税金負債	53	111
前受金	1,645	2,394
賞与引当金	261	56
その他流動負債	2,073	2,382
流動負債合計	38,684	51,596
固定負債		
社債	100	-
長期借入金	107,732	93,308
退職給付引当金	857	801
役員退職慰労引当金	56	52
特別修繕引当金	944	1,564
受入敷金保証金	7,926	7,991
リース債務	6,219	5,921
繰延税金負債	1,481	2,044
その他固定負債	1,497	1,180
固定負債合計	126,812	112,860
負債合計	165,496	164,455
純資産の部		
株主資本		
資本金	13,092	13,092
資本剰余金	6,431	7,613
利益剰余金	29,820	34,017
自己株式	4,910	48
株主資本合計	44,433	54,674
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1,183	2,403
繰延ヘッジ損益	1,205	1,232
為替換算調整勘定	59	467
その他の包括利益累計額合計	2,448	4,103
少数株主持分	346	225
純資産合計	47,228	59,002
負債純資産合計	212,724	223,458

【注記事項】

（連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更）

該当事項はありません。

（会計方針の変更）

該当事項はありません。

（会計上の見積りの変更）

従来、有形固定資産の船舶の耐用年数は主として法人税法に規定する方法と同一の基準によっておりましたが、ケミカル船事業の構造改革等による船腹調整が進展したことを契機に、船舶の使用実績を見直した結果、従来の耐用年数と経済的使用可能予測期間との乖離が明らかになりましたことから、当社グループ（Iino Shipping Asia Pte.Ltd.を除く）が所有する船舶について、第1四半期連結会計期間より耐用年数を以下の通り見直し、将来にわたり変更しております。

耐用年数の変更内容

	変更前	変更後
オイルタンカー・ケミカルタンカー	13年	18年
大型ガスカリヤ	13年	20年
小型ガスカリヤ	11年	20年

これらの結果、従来の方法によった場合と比較し、当第3四半期連結累計期間の営業利益、経常利益及び税金等調整前四半期純利益は、それぞれ1,411百万円増加しております。なお、セグメント情報に与える影響は「セグメント情報等」に記載しております。

（四半期連結財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理）

（税金費用の計算）

税金費用については、当第3四半期連結会計期間を含む連結会計年度の税引前当期純利益に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、税引前四半期純利益に当該見積実効税率を乗じて計算しております。

ただし、当該見積実効税率を用いて税金費用を計算すると著しく合理性を欠く結果となる場合には、税引前四半期純損益に一時差異等に該当しない重要な差異を加減した上で、法定実効税率を乗じて計算しております。

( 四半期連結貸借対照表関係 )

偶発債務

保証債務

連結会社以外の会社の金融機関等からの借入に対し、債務保証を行っております。

前連結会計年度 (平成25年3月31日)			当第3四半期連結会計期間 (平成25年12月31日)		
LNG EBISU Shipping Corporation	設備資金	1,883百万円	LNG EBISU Shipping Corporation	設備資金	1,772百万円
Jipro Shipping S.A.	"	3,026	Jipro Shipping S.A.	"	2,824
Central Tanker S.A.	"	1,693	Central Tanker S.A.	"	1,544
MARTIN ISLAND SHIPPING S.A.	"	95	MARTIN ISLAND SHIPPING S.A.	"	358
計		6,697	計		6,498

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第3四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成していません。

なお、第3四半期連結累計期間に係る減価償却費(無形固定資産に係る償却費を含む。)は、次のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年12月31日)
減価償却費	7,696百万円	6,421百万円

(株主資本等関係)

前第3四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年12月31日)

配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年6月27日 定時株主総会	普通株式	200	2.0	平成24年3月31日	平成24年6月28日	利益剰余金

(2) 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間末後となるもの

該当事項はありません。

当第3四半期連結累計期間(自平成25年4月1日至平成25年12月31日)

1 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年6月26日 定時株主総会	普通株式	400	4.0	平成25年3月31日	平成25年6月27日	利益剰余金
平成25年10月31日 取締役会	普通株式	333	3.0	平成25年9月30日	平成25年12月2日	利益剰余金

(2) 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間末後となるもの

該当事項はありません。

2 株主資本の著しい変動

当社は、平成25年7月23日を払込期日とする公募による自己株式の処分(一般募集)を行ったことに伴い自己株式処分差益が1,037百万円発生したことにより、同額資本剰余金が増加するとともに、自己株式が4,230百万円減少しております。

また、平成25年8月8日を払込期日とする第三者割当による自己株式の処分(オーバーアロットメントによる当社株式の売出しに関連する第三者割当)を行ったことに伴い自己株式処分差益が145百万円発生したことにより、同額資本剰余金が増加するとともに、自己株式が634百万円減少しております。

上記の影響等により、当第3四半期連結会計期間末において、資本剰余金が7,613百万円、自己株式が48百万円となっております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第3四半期連結累計期間(自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注)1	四半期連結損益 計算書計上額 (注)2
	外航 海運業	内航・近海 海運業	不動産業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	48,864	5,531	8,511	62,905	-	62,905
セグメント間の 内部売上高又は振替高	384	396	54	66	66	-
計	48,480	5,926	8,565	62,971	66	62,905
セグメント利益又は損失( )	186	172	3,040	3,026	0	3,026

(注)1. セグメント利益又は損失( )の調整額0百万円は、セグメント間取引消去であります。

2. セグメント利益又は損失( )は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

「外航海運業」セグメントにおいて、当社の子会社が保有する船舶について帳簿価額を回収可能価額まで減額し減損損失として計上しております。

なお、当該減損損失の計上額は、第3四半期連結累計期間においては150百万円であります。

(のれんの金額の重要な変動)

該当事項はありません。

(重要な負ののれん発生益)

該当事項はありません。

当第3四半期連結累計期間（自平成25年4月1日 至平成25年12月31日）

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額	四半期連結損益 計算書計上額 (注)
	外航 海運業	内航・近海 海運業	不動産業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	57,149	6,427	8,575	72,151	-	72,151
セグメント間の 内部売上高又は振替高	291	322	50	81	81	-
計	56,859	6,749	8,624	72,232	81	72,151
セグメント利益	1,546	561	3,187	5,295	-	5,295

(注) セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

(耐用年数の変更)

会計上の見積りの変更に記載の通り、第1四半期連結会計期間において、オイルタンカー・ケミカルタンカーについては耐用年数を従来の13年から18年に、大型ガスキャリアについては耐用年数を従来の13年から20年に、小型ガスキャリアについては耐用年数を従来の11年から20年に変更したため、報告セグメントの対象船舶の耐用年数を同様に変更しています。当該変更により、従来の方法に比べて、当第3四半期連結累計期間の「外航海運業」のセグメント利益が1,056百万円増加し、「内航・近海海運業」のセグメント利益が355百万円増加しています。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年12月31日)
1株当たり四半期純利益金額	11円26銭	46円36銭
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額(百万円)	1,126	4,930
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る四半期純利益金額(百万円)	1,126	4,930
普通株式の期中平均株式数(千株)	99,991	106,343

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

当社は、平成26年1月31日開催の取締役会において、連結子会社にて建造中の船舶1隻の売却を決議いたしました。これにより固定資産売却損(特別損失)として約17億円を当連結会計年度におきまして計上する予定であります。

2【その他】

平成25年10月31日開催の取締役会において、当期中間配当に関し、次のとおり決議いたしました。

- (1) 配当金の総額.....333百万円
- (2) 1株当たりの金額.....3円00銭
- (3) 支払請求の効力発生日及び支払開始日.....平成25年12月2日

(注) 平成25年9月30日現在の株主名簿に記載又は記録された株主に対し、支払いを行います。



## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の四半期レビュー報告書

平成26年2月7日

飯野海運株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 金 塚 厚 樹 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 川 瀬 洋 人 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている飯野海運株式会社の平成25年4月1日から平成26年3月31日までの連結会計年度の第3四半期連結会計期間（平成25年10月1日から平成25年12月31日まで）及び第3四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年12月31日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結貸借対照表及び注記について四半期レビューを行った。

### 四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

### 監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、飯野海運株式会社及び連結子会社の平成25年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する第3四半期連結累計期間の経営成績を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

### 強調事項

1. 会計上の見積りの変更に記載されているとおり、会社グループは第1四半期連結会計期間より一部の船舶について耐用年数を変更している。
2. 重要な後発事象に記載されているとおり、会社は平成26年1月31日開催の取締役会において、連結子会社にて建造中の船舶1隻の売却を決議している。

当該事項は、当監査法人の結論に影響を及ぼすものではない。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。

2. 四半期連結財務諸表の範囲にはX B R L データ自体は含まれていません。